39 八坂神社

やさかじんじゃ〔てんのうさま〕

——春日部市粕壁東四—一—一八（粕壁町字新々田）

歴史

「武州文書」の一つで、戦国期の成立と思われる「市場之祭文写」にも、「下総州春日部郷市祭成之」とあるように、このころ既に春日部は市場として知られるようになっていたものと思われる。この春日部の市は、毎月四・九のつく日に市が立つ六斎市であり、その市神として信仰されてきたのが当社である。

明和七年（一七七〇）八月二十一日の火災によって社殿が焼失し、この際に一切の書類が灰となってしまったため、勧請の年月日や由緒等は不明であるが、市神として信仰されてきたという経緯から考えると、春日部の市の成立に伴って勧請されたものと推測される。また、口碑によれば、当社は、初めは最勝院という真言宗の寺院の境内の一角に祀られていたとも伝える。これが事実であるならば、最勝院は永正元年（一五〇四）の創立であるため、当社の勧請はそれ以降のことなる。当社が現在の社地に移った時期は定かではないが、明和七年の火災を機に移ったものとも推測される。

現在の社地は、元来は柳家の所有地で、同家が社家として奉仕してきた。しかし、柳家が故あって神職を辞し、境内地の所有者も一、二転するに至り、氏子・崇敬者と総代が協議した結果、昭和十年に境内地一四一坪を神苑として八四六円で譲り受けた。また、この経緯を子々孫々に伝えようと「神苑記念碑」も境内に建立された。

信仰

現在の祭神は須佐之男命であるが、神仏分離までは牛頭天王を祀っていたことから、当社は今でも「天王様」の通称で親しまれている。また、本殿の内陣には、神体の鏡と共に、往時の名残である「牛頭天王」の社号額や「祭神市神牛頭天王素盞嗚尊諸祈禱庶呪成就守」などと書いた嘉永七年（一八五四）銘の祈禱札が納められている。

年間の祭りは、七月の夏祭りだけである。この祭りは、元来は七月九日から十五日まで一週間にわたって行われ、九日に「御魂入れ」といって神輿を組み立てたりお仮屋を作り、十二日と十四日には旧粕壁町の一九町内の神輿と山車・屋台が巡行し、最後の十五日には神体を奉安した当社の神輿が町内継送りで宿内を渡御すると共に、若い衆が獅子頭を持って各戸を回り、悪魔祓いをしていた。太平洋戦争後は一時中断したが、復興が模索され、市制二十周年を迎えた昭和四十八年からは市民祭りとして、前にも増して盛大に行われるようになった。

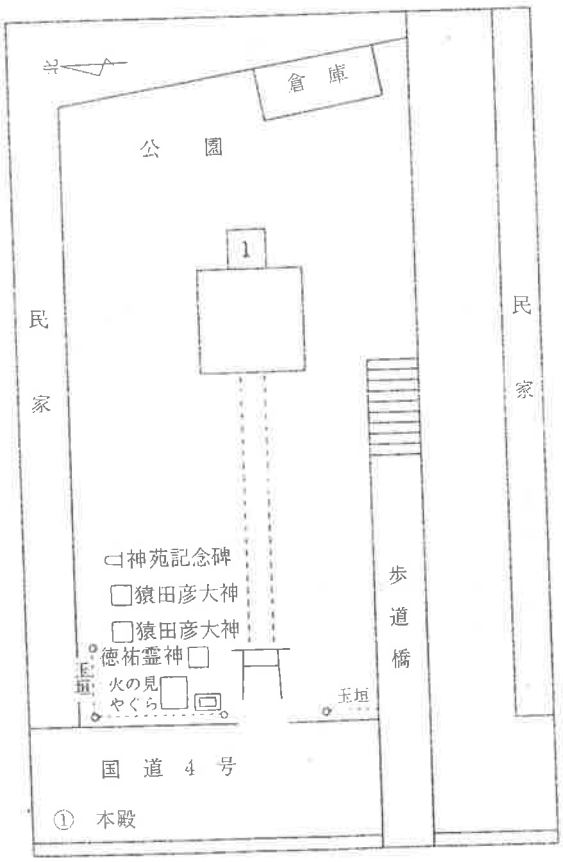
そのため、夏祭りの祭日は七月中旬の土・日曜日に変わり、これに参加する神輿も、各町内の神輿だけでも二四基に増えた。更に、子供の神輿や引太鼓も加わるため、この二日間は、どの町内も祭り一色に包まれる。祭りが最高潮に達するのは、二日目（日曜日）の午後六時から九時三十分にかけて行われる各町内の神輿のパレードで、二四基の神輿が勢揃いして渡御する様には、見る者を圧倒する熱気がある。

氏子

春日部市の市街地の中央部を形成する旧粕壁町は、江戸時代における日光街道の粕壁宿を中心に発展してきた地域である。当社は、この粕壁宿で行われていた市の守護神であったことから、その氏子区域は旧粕壁町一帯の一九の町内に及ぶ。

具体的には、浜川戸・内出町・旭町・宮本町・上町・仲町・春日町・富士見町・元町・本町・三枚橋・大砂町・一宮町・東町・川久保・元新宿・大池町・内谷町・陣屋町がこれに相当するが、通常は、宮元である一宮町が神社の管理を行っており、総代も一宮町の町内から五名が選出される。なお、一宮町は、昔は「新々田」といったが、当社が地内に鎮座することから、「市宮」にちなんで町名を改めたという。また、旧粕壁町を挙げての盛大な祭りである夏祭りには、各町内会の役員が祭典委員となり、祭りの約一か月前から準備を進めている。

かつて、粕壁宿の人々の間では「初午の日と市の日が重なる年は火災が多い」といわれ、このような年には当社の境内で初午の日に火防祭りを行っていた。この行事は、まず祭典を奉仕して火防を祈願し、その後で境内に設けた小屋に御神灯の火を移して焚き上げることによって火難を除こうというもので、既に文化二年（一八〇五）の「当宿市初午旧例火祭ニ付委細御届」には、その様子が活写されている。しかし、元来は宿全体で行っていたこの行事も、文政二年（一八一九）以降は宮元の新々田（現一宮町）だけで行うようになり、それも昭和二十二年を最後に途絶えてしまった。ちなみに、この行事は消防訓練を兼ねるものでもあり、小屋に移した火は、古くは小屋を打ち壊して消火していたが、後には町内の手押しポンプで消すようになった。



夏祭り